昔の恩を報ひんと
囚屋に日頭訪ひ行けば
我身を耻ぢて會はざるに
力を添へん術も無く
詮も無ければ徐ろに
事謀らんと思ひつゝ
融は妻を伴ひて
こゝ片瀬には來りしが

眺も清き磯濱の
松の根株に腰掛けて
霽れしみ空を眺むれば
世の憂事も忘るゝや
前に見ゆなる江の島は
薄紫に浮びつゝ
寄せてはかへす小波の
清き響も面白し

俊子は夫と諸共に
此處に遊びし往昔の
嬉しかりける追憶に
花の面も輝きて

いと樂しげに微笑める
夫の顏を仰ぎつゝ
二年前の事々を
語り合はすや睦まじく

二人が前を過ぎりつゝ
片瀨を下る釣舟に
秋の夕日の今滿ちて
欸乃緩う流れけり

かゝる折しも忙しげに
馳來し宿の婢女
客ありと知らするに
妹脊は誰ぞと思ひしが

打伴立ちて急ぎつゝ
歸らんとする出會に
思はず見えし人の影
日頭ぞ茲に尋ね來ぬ

夫れと見るより妹と脊が
夢かと思ふ喜びや
「おゝ師の君」と進み寄る
融の聲は震へつゝ

二年ぶりに廻り逢ふ
其嬉しさに取交ぜて
變り果てたる面わをば
見る其胸の悲しさよ

流石に剛き日頭氏も
鋭き眼うるめつゝ
言葉も無くて佇めるる
心の中や如何ならん

世をば蓋はん氣も落ちて
飛ぶこと成らぬ羽扱鳥
たゞ融をばせめてもの
力とするぞ可憐なる

融は歎く日頭をば
眞情厚く慰めつ
打伴立ちて沙原を
宿の方へと辿りしが

折しも前に歸りたる
妻は夕餐の設備の
早成りぬるを知らせにと
林の中を來りけり

日頭は高く潔き
俊子の節操思ふにも
又今更に亂れたる
富美子の上を悲むや

三人が影は地に引きて
西は輝く夕榮の
霽れたる空に悠然と
富士の姿は聳えたり

二十　鹿島立

かぎりなき雲井のよそにわかるとも
人を心におくらさんやは

旅は悲しきものとこそ
昔の人に聞きぬれど
戀しき夫と共にあらば
何憂き思ありぬべき

俊子は融諸共に
今日を榮の鹿島立
父や美津子に送られて
行く樂しさや如何ならん

博士の位授けられ
重き官を身に帶びて
今、外國に使する
融の胸も嬉しさの

姉が形見の孤兒と
日頭の子をば伴ひて
我故郷を立出る
二人の上に幸よ在れ

日頭は持ちし盃を
融妹脊にすゝめつゝ
互に固く握る手に
籠むる力もいと強く

「汝等二人を除きては
外に頼もあら海の
我が心をば憐みて
健かにしも暮らせよ」と

言ふを聞くにも老人の
目には忍びぬ露滿ちて
「幸くあれよ」と言掛くる
袂も袖も津々なり

譽の旅と言ひ乍ら
別れと成れば悲しくて
俊子は友の手をとりつ
離れとも無き船の上

頓て出づべき刻の來て
皆淋しげに下りて行く
後姿を眺めつゝ
悲し心地に立ちにしが

汽笛の響勇ましく
夕の空に轟けば
船は次第に故郷を
誰れも行くか徐々と

憂を知らぬ少年の
二人はいとも勇みつゝ
舷うつて高聲に
軍歌唱うて躍るなり

父は友はと眺むれば
黄昏れて行く闇の中に
見送人が振る巾の
白きばかりが目立ちつゝ

それかとも思ふ船々は
暗きが中に消え果てゝ
港に見ゆる灯火の
影いよ〳〵にうすれゆく

融妹脊は見送の
船の姿の見えぬ迄
甲板の上に佇みて
一つ心に眺めしが

日はいつしかに暮れ果てゝ
浪の音のみ物凄き
船室の中に打向ふ
心は流石騒ぎつゝ

寐ねんとすれど眠られぬ
二人が夢は日本の
老いたる父や日頭氏の
上に飛びたる夜やうつゝ

あはれ潮に順いて
海路安けき妹と脊の
榮あるべき行末は
千萬神も守るらん

覺むれば朝日朗らかに
舞れたる空に輝きて
女波夫波は穏かに
太平洋を渡りけり

家庭新詩 女夫波の歌 終

明治三十九年三月三日印刷
明治三十九年三月廿一日發行

著者 滝口白羊
發行者 東京市神田區表神保町二番地 福岡新三
發行者 東京市淺草區下平右衛門町九番地 岡村庄兵衛
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 秀英舍

不許複製

（定價金四拾錢）

發行所
東京淺草下平右衛門町九番地 岡村書店
東京神田區表神保町二番地 福岡書店

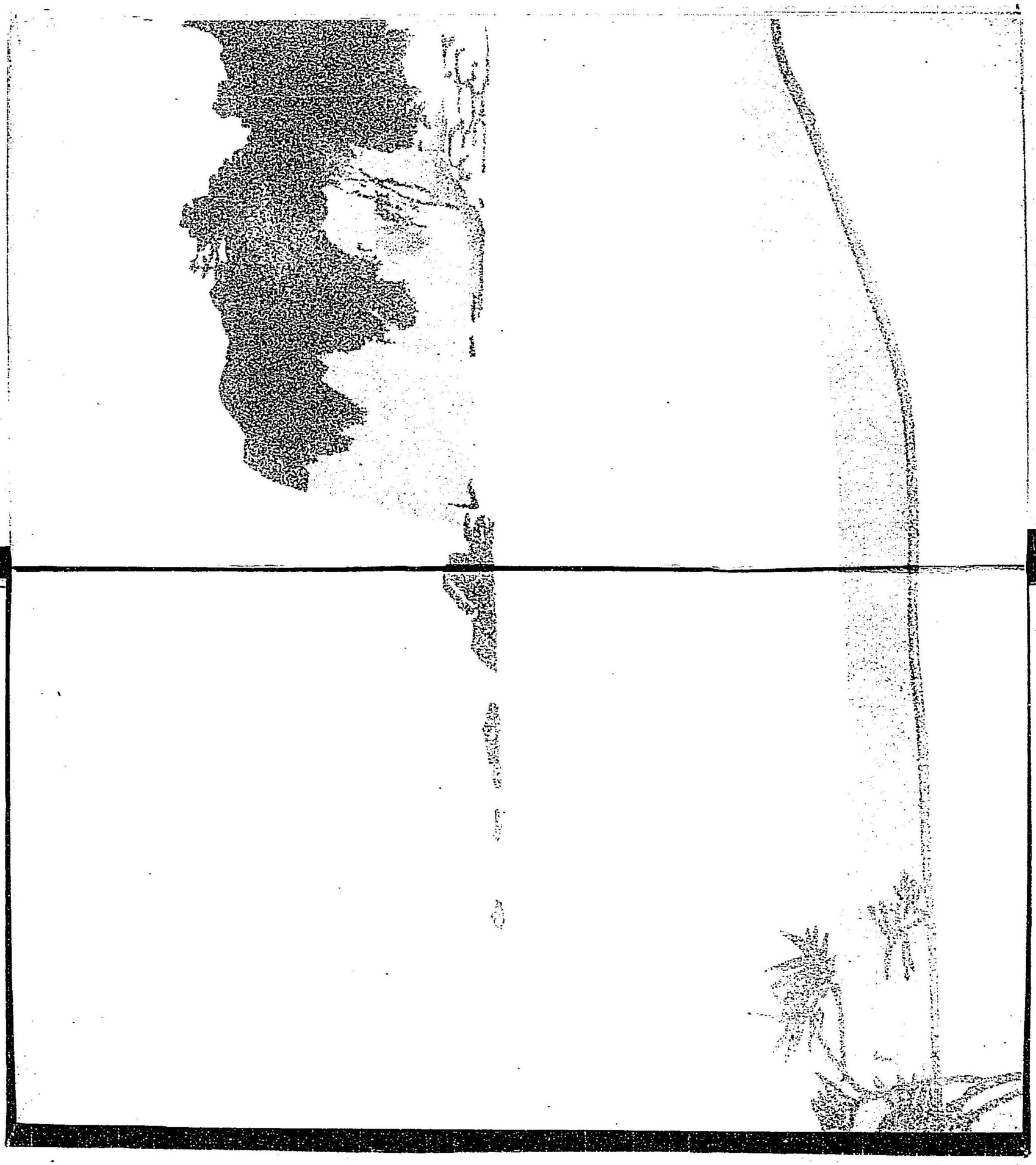
發賣所
東京 東京堂
金 上田屋
金 淺見文林堂
金 至誠堂
金 大川屋
金 林平
金 前川堂
金 修學堂
金 得策堂
大阪 杉本書店
金 吉岡寶文館
京都 山中勘次郎
名古屋 星野文星堂
金 川瀬代助
熊本市 長崎次郎
久留米 菊竹書店
函館 小島大盛堂
札幌 富貴堂

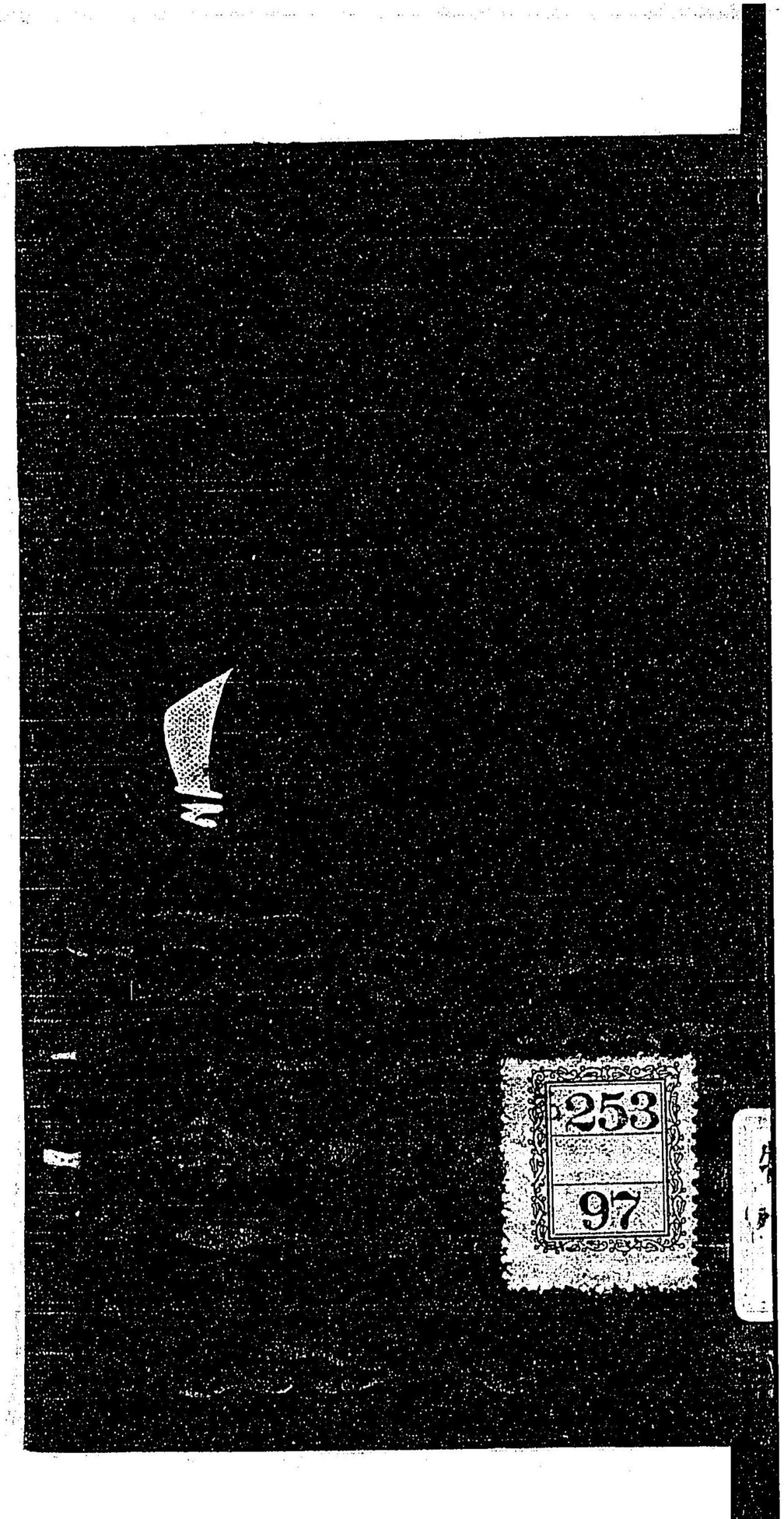
新刊 メイテルリンク 神秘論 西村醉夢譯 菊判大 定價四拾錢 郵税四錢

好評十三版 家庭新詩 不如歸の歌 溝口白羊作詩 總クロース金字入 定價壹圓五拾錢 郵税四錢

增刷四版 家庭新詩 金色夜叉の歌 鏑木清方繪 總クロース金字入 定價四拾五錢 郵税六錢

再版 西詩愛吟集 與謝野鐵幹序 袖珍美本二百頁 小原文學士譯 定價壹圓五拾錢 郵税四錢





088120-000-0

特65-139

女夫波の歌

溝口　白羊／著

M39

DBG-0218